論　文

「獅子の騎士」物語の平板化の過程

――Ulrich Füetrer の *Iban* と Stockholm46 紙写本版 *Ívens saga* ――

林　邦彦

Making the tale of the Knight with the Lion monotonous: Ulrich Füetrer's *Iban* and the Stockholm46-version of *Ívens saga*

HAYASHI, Kunihiko

Abstract

Yvain, the Knight with the Lion which Chrétien de Troyes composed in the late 1170s was used by the German poet Hartmann von Aue as the basis for his *Iwein* which is considered to be written in the early 1200s. *Iwein* was adapted by Ulrich Füetrer for the literary audience in Germany in the late 1480s and his work is called *Iban*. And Chrétien's work was also translated into Norwegian and further into Icelandic. The Icelandic version is called *Ívens saga*. *Ívens saga* survives in two vellum manuscripts (from c. 1400 and the fifteenth century, respectively) and twelve paper manuscripts from the seventeenth, eighteenth, and nineteenth centuries. But the version which the paper manuscript Stockholm46 (1690) contains has a quite different content from that of other manuscripts. This paper focuses on Füetrer's *Iban* and the Stockholm46-version of *Ívens saga*, above all on the differences between the changes made to the characters at the adaptation from their originals because both Füetrer's work and the Stockholm46-version of *Ívens saga* are more monotonous than their originals and one of the causes of this must be the changes made to the characters at the adaptation.

要約

Chrétien de Troyesが1177年~81年頃に著したとされる*Yvain ou Le Chevalier au Lion*（『イヴァン、または獅子の騎士』）はドイツ語圏では13世紀初頭にHartmann von Aueによって*Iwein*と呼ばれる作品へと翻案され、その後、1480年代に、Ulrich Füetrerが*Iwein*を翻案し、*Iban*を著した。このChrétienの作品は13世紀にノルウェー語を経てアイスランド語へも翻

案され、*Ívens saga*と呼ばれる作品が生まれた。この*Ívens saga*は二つの羊皮紙写本(それぞれ1400年頃、および15世紀中頃のものとされる)と、17世紀以降のものとされる12の紙写本によって伝えられているが、この紙写本のうち、1690年頃に作成されたとされるStockholm46と呼ばれる紙写本のものは、羊皮紙写本や他の紙写本のものと比べ、内容面で多くの相違が見られる。この、Chrétienの作品のドイツ語圏とアイスランド語圏での第二翻案段階と言えるUlrich Füetrerの*Iban*とStockholm46版*Ívens saga*は、ともに、その言語圏の第一翻案段階と比べ、物語が平板化しているのが特徴であるが、その点と不可分である登場人物の造形特徴における、それぞれの第一翻案段階との相違について、両者の間で比較し、それぞれの特徴を明らかにし、その背景を探る。

キーワード

アーサー王文学(Arthurian Literature)

サガ文学(Saga Literature)

ハルトマン・フォン・アウエ(Hartmann von Aue)

ウルリヒ・フュエトラー(Ulrich Füetrer)

はじめに

Chrétien de Troyesが1177年~81年頃に著したとされる*Yvain ou Le Chevalier au Lion*(『イヴァン、または獅子の騎士』。以下、*Yvain*とする。)は、主人公Yvainが物語前半では騎士として業績を上げ、騎士として完全な栄誉に輝いたかに見えるものの、大きな過ちを犯し、挫折を経験するが、その後、物語の後半では、前半とは全く異なる価値観で騎士活動を行う人物へと変貌し、最後には騎士として完全な栄誉を得る、という内容の物語である。この作品はヨーロッパのいくつもの言語圏で翻案され、写本により今日まで伝えられている。ドイツ語圏では13世紀初頭にHartmann von Aueによって*Iwein*と呼ばれる作品へと翻案され、その後1480年代に、Ulrich Füetrerが*Iwein*を翻案し、*Iban*を著している。*Iban*は*Iwein*を大幅に短縮したものであるが、プロットの上では基本的に*Iwein*のものを踏襲している。

英語圏でも*Yvain*の翻案は行われ、*Ywain and Gawain*と呼ばれる作品が一つの写本によってのみ今日まで伝えられている。

*Yvain*は北欧語圏にも翻案されている。まず13世紀半ばにノルウェー王のHákon Hákonarson(在位1217‐1263)の命でChrétienの*Yvain*がノルウェー語に翻案され、それがさらにアイスランド語へ翻案される。ノルウェー語の写本は現存していない。アイスランド語では、二つの羊皮紙写本(1400年頃のものとされるStockholm6と15世紀中頃のものとされるAM489)、ならびに17世紀以降のものとされる12の紙写本によって伝えられている。アイスランド語の写本によって伝えられる作品は*Ívens saga*と呼ばれ、羊皮紙写本のものは、少なくともプロットの上では、Chrétienの作品に比較的忠実である。紙写本にも、内容の上で羊皮紙写本に比較的忠実なものも多いが、1690年頃に作成されたとされるStockholm46と呼ばれる紙写本によるもの(現在では遺されていない14世紀後半のものとされるOrmsbókと呼ばれる写本を基にしたと考えられている)は、羊皮紙写本や他の紙写本のものと比べ、分量が大幅に少なく、内容面でも多くの相違が見られる。

また、北欧語圏ではこれとは別に、1303年頃、既出のHákon Hákonarson王の孫のHákon Magnússonの妻Eufemiaの命により*Yvain*のス

本論文冒頭

ウェーデン語への翻案が行われ、*Herr Ivan Lejonriddaren*と呼ばれる作品が遺されている。なお、この*Herr Ivan Lejonriddaren*は14世紀中にデンマーク語へのかなり忠実な翻案がなされ、*Herr Ivan Løveridder*と呼ばれる作品となって今日まで伝えられている。

これらのうち、ドイツ語圏とアイスランド語圏では、Chrétienの*Yvain*が、一度各々の言語に翻案された後、(アイスランド語圏ではノルウェー語への翻案を経た後であるが)さらに異なった形に翻案されたものが存在していることになる。ドイツ語圏では一度目の翻案であるHartmannの作品が、Ulrich Füetrerによってさらに翻案され、アイスランド語圏では、異なる形のものを伝える現存写本の間に直接の関係はないものの、Chrétienの作品に比較的忠実な翻案がなされた後に、大きく改変された版が現れたと考えられる(1)。

本稿では、Chrétienの*Yvain*にまで遡る作品のうち、ドイツ語圏とアイスランド語圏における(現在まで写本が残存している物についてのみ考えるならば)第二翻案段階と言える、Ulrich Füetrer の*Iban*とStockholm46版*Ívens saga*を取り上げたい(2)。

というのも、過去の研究において重要視されてきたのは、各々の言語圏における第一翻案段階と言える*Iwein*と*Ívens saga*羊皮紙写本版で、これらについては先行研究も多い。しかし、第二段階の*Iban*やStockholm46版*Ívens saga*については先行研究が少なく、この両者について、各々の、第一翻案段階との相違内容の比較を行った研究は、管見によれば見られない。

作品内容について*Iban*とStockholm46版*Ívens saga*のいずれにも共通して言えるのは、双方とも、その言語圏の第一翻案段階と比べ、大幅に短縮されている点、ならびに、物語が平板化している点である。中でも後者の「物語の平板化」という点は、登場人物の造形特徴と不可分である。そこで、本稿ではこの物語の登場人物について、*Iban*とStockholm46版*Ívens saga*における、それぞれの言語圏の第一翻案段階との相違点について、両者の間で比較し、それぞれの特徴を明らかにし、その背景を探りたい。

1. Iban/Íven(3)

1.1 Iban/Ívenの人物像の改変における共通点

この物語の主人公であるIban/Ívenの人物像の改変における大きな共通点は、*Iban*とStockholm46版*Ívens saga*のいずれにおいても、Iban/Ívenが作品途中で経験する挫折によって大きく変貌するようには描かれておらず、作品の前半部から模範的な騎士として描こうとする作者(改変者)の意図が感じられる点である。その中でも、未亡人となった泉の国の王妃と結婚し、泉の国の領主となったIban/ÍvenがGaban/Valvinの説得を受けて再び冒険の旅に出るべく王妃に許可を願い出る場面は、Hartmann作品や*Ívens saga*羊皮紙写本版では、いずれもIwein/Ívenは当初、自らの願いの内容を明かさず、ただ自分の頼みを許してほしいとのみ願い出て、奥方から許可を得て初めてその内容を明かす。策略的ともとれる。しかし、*Iban*とStockholm46版*Ívens saga*では、そのいずれにおいても、奥方に対し、最初から自らの願いの内容を明らかにする形に改変されている:

Hartmann:

Nû versuochter zehant / an die vrouwen daz er vant: / wan dô sîn bete was getân, / done hete sî des deheinen wân / daz er sî ihtes bæte / wan daz sî gerne tæte. / daz geweren rou sî dâ ze

本論文冒頭

stat, / dô er sî urloubes bat / daz er turnieren müese varn. (v. 2913-2921)

そこでイーヴェイン卿はすぐに奥方の元へ行き、許可を得た。というのも、彼が願い出た時、彼女は彼が、何か自分が喜んでしたくはないことを願い出るとは考えてもいなかったからである。彼が、騎馬試合の旅に出なければならないと彼女に暇を乞うた時、彼女はすぐに、自分が彼に願いを認めたことを悔んだ。

Füetrer:

er ging zu seiner ameyen / das si in werben liess für an nach preis. / er pat urlabs, mit diser schar zúe reitten: / “durch ewer wird unnd súesse mynn / wollt ich ett noch ain zeit nach eeren streitten.”(詩節101, v. 3-7)

彼女がこれから彼に称賛を求めさせてくれるよう、彼は自分の恋する人のもとへ行った。彼はこの人達とともに騎行するべく暇を求めたのだ。「あなた様の御名声や甘い愛のために、私はもうしばらくの間、名誉を求めて戦いたいのです。」

Ívens saga Stockholm6:

mín fridazsta fru. þu ert lif mitt ok hiarta likamz huggan heilsa ok gledí. Jata mer eína bæn er ek vil þik bidía. ok hon þegar sv(arar) huatt sem þer vilíth mik bidía ok ydr likar þat skal allt eptir ydrum vilía vera. þuiat þu ert mínn herra. þa m(ælti) Iv(ent) Ek bídr ath þu lofir mer ath fylgía J brott Artus kongi. ok vera Iattreidum med honum ath þeir heldí mik eigi firir meira bleydí mann enn adr. (S. 78-79 [4])

「私の最も美しき奥方よ、あなた様は私の人生、心、体の慰み、幸せ、喜び。あなた様にしたい願い事をひとつかなえていただきたいのです。」すると彼女はすぐに、「あなたが私に頼みたいことで、あなたにとって好ましいことであれば、何であれあなたの思う通りになるようにいたしましょう。あなたは私の主人なのですから。」と答えた。するとイーヴェンは言った。「私がアルトゥース王について出発し、王と共に騎馬試合に出ることを許していただきたいのです。私が以前に比べて臆病になったなどと思われてはなりませんから。」[5]

Ívens saga Stockholm46:

Mïn kiæra frü þü ert mitt lif ok huggan ok sannur elskuge, lofva mier at rïda medur Artus köngi at fremia minn riddara skap at ek virdunst æigi meiri bleidumadur sïdann ek kendunst enn ädur, (S. 78-79)

「我がいとしの奥方よ、あなた様は私の人生、慰み、真の愛です。私に、アルトゥース王と出発し、騎士としての力を高めることをお許しください。あなた様と結ばれて以来、以前に比べて臆病になったなどと思われてはなりませんから。」

1.2 Iban/Ívenの人物像の改変における相違点

Füetrerの作品では、Ibanが挫折に至った原因をIban自身よりもむしろ外的な要因としてのfraw Mynneに帰すことによってIbanを作品前半部から一貫して模範的な騎士として描こうとする意図が感じられるとの指摘は以前からなされている[6]。このfraw Mynne(Hartmann作品ではfrou Minne)という存在は*Ívens saga*では羊皮紙写本版・Stockholm46版ともに現れないものであるが、一方、Iban/Ívenの人物像の改変について、Füetrer作品にはなく、Stockholm46においてのみ見られる特徴として挙げられるのは、Stockholm46では、物語の後半部においても、Ívenの言動に関して、

羊皮紙写本版の場合と比べ、さらにÍvenが好印象を与えるよう改変されているという点である。

まず取り上げるのは、Íven がLunetaのための泉の国での闘いに勝利した後、休養を取らせてもらう城であるが、まずÍvenはLunetaに対し、彼女のために闘う約束をした後、ある城で宿を取り、翌日、その城の城主一家を苦しめている巨人を斃した後、Lunetaのための戦いが行われる場所へ向かい、そこでの戦いでÍvenは勝利を収める。その後、 Ívenは泉を出発し、ある城で休養をとらせてもらうが、羊皮紙写本では、この城はこの場面でしか登場しない城であるのに対し[7]、Stockholm46では、この城が、先に巨人を斃した城になっている[8]。巨人を斃した後、Ívenはすぐに Lunetaのための戦いの場へ向かわなければならず、Ívenに城に留まってもらいたかった城の人々は残念がったが、Stockholm46における改変の結果「実現」したÍvenによるその城の再訪は、彼の即座の出発を惜しんだ城の人々の思いに応えるかのような印象を与える。これはドイツ語圏のものについては、Hartmann、Füetrerともに見られない。

次に取り上げるのは、「発見する冒険」(Finnanndí Attburdr)と呼ばれる城でのÍvenの行動である。羊皮紙写本では、Ívenは貧しい身なりで過酷な労働を強いられている300人の女性達を目の当たりにしても、彼は特に何らかの反応を示すわけでもなく、すぐに広間の方へ向かってしまう。しかしStockholm46ではÍvenは彼女らを見るや、すぐにその方へ向かい、事情を尋ね、さらに翌朝Ívenは、城主を含め、誰からも闘いを強制されることなく、自らの意志で、武装して黒男達との闘いに赴く[9]。この300人の女性達を見た後のIban/Ívenの行動については、HartmannではIweinはまず城の門番に事情を尋ねようとするが、門番が教えてくれないため、Iweinは彼女らの元へ、直接事情を尋ねに行く(v. 6186-6318)。FüetrerではIbanがまずこの城の城主に出迎えてもらい、果樹園に案内され、もてなしを受けた後、女性達が働いている様を目にするが、その時、城の使いの者から食事の準備ができたと伝えられ、その方に向かう(詩節243-245)。ただ、Ívenが翌朝「誰からも闘いを強制されることなく、自らの意志で、武装して黒男達との闘いに赴く」という点は、Stockholm46においてのみ見られる改変である[10]。この箇所でのÍvenの行動は、羊皮紙写本の場合と比べ、より思いやりを持った人物との印象を与えるものである。

ここで挙げたStockholm46に見られるÍvenをめぐる改変箇所は、いずれも、ÍvenがArtus王の宮廷の面々の前で泉の国の使者から罵倒され、発狂し、宮廷を出奔する場面の後に位置するものである。この物語は、特にフランス語、ドイツ語の作品については一般に、ここでの主人公の名誉喪失と発狂によって大きく二部に分けられるものと考え、第一部での主人公の騎士として、あるいは人間としてのあり方は欠陥をはらんだものであったの対し、第二部における主人公のあり方は、作品全体を通じて作者が理想的な騎士の姿として訴えようとしたものだと考えるのが通例であるが、ここで挙げたStockholm46における改変からは、物語の第二部における主人公Ívenの人物像についても、さらに、より弱者への奉仕精神に満ちたものとして描こうとの改変者の意図が窺えよう。

2. Gaban/Valvin

Artus宮廷の騎士Gaban/Valvinの作品中での扱われ方については、Füetrerの作品とStockholm46の間で大きな相違がある。

まずFüetrer作品におけるGabanから見てゆきたい。Füetrer 作品の原典であるHartmannの作品では、GaweinはArtus王の宮廷を代表する模範的騎士とされ、同宮廷で理想とされている騎士のあり方を最も模範的に体現している存在である。その理想とされている騎士のあり方とは、「常日頃から冒険や戦いの場を求め、そうした場で業績を上げ、名誉を得ることを重要視する」というものである(11)。しかし、Hartmannの作品では、Gaweinがそのような、宮廷で理想とされる騎士のあり方にあまりにも固執しているが故に、他者の事情に配慮をめぐらすことができず、周囲に多大な迷惑をかけてしまう様が強調して描かれている(12)。このGaweinに代表されるような、冒険や戦いの場で業績を上げ、名誉を得ることを重要視する騎士のあり方が作品全体としては否定的に扱われていることは以前より指摘されている(13)。

これに対し、Füetrer作品におけるGabanの人物造形の大きな特徴の一つは、このような、冒険や戦いの場で業績を上げることに固執するGabanのあり方が否定的に描かれず、Hartmannの作品におけるGaweinのそのような騎士としての姿勢に起因する他者への配慮に欠けた言動や他者に迷惑をかける様の描写が削除されているという点であり(14)、二つ目は、物語の中盤で、Artus王の王妃が他所からやってきた騎士Meliagannsに誘拐された後、Gabanが彼らを追跡し、実際にMeliagannsと戦い、王妃を取り戻す場面が付加されている点である。

この王妃の誘拐とGabanによる救出の顛末は、IbanがLunetのために戦う約束をした後、ある城に宿をとった際、巨人による脅迫に苦しめられていたその城の城主が、Gabanによる救援を求めてArtus王の宮廷へ赴いたものの、それが得られなかった理由としてIbanに物語るものである。ここではGabanは苦境に陥ったArtus王妃を救出するため、宮廷の他の騎士が誰一人太刀打ちできなかったほどの武勇を持つMeliagannsを相手に戦ってこれを斃し、王妃を無事に救出する。さらには自ら斃した敵のために十字架の形の墓まで作ってやるなど、もはや危害を加えるものではなくなった敵に対する思いやりまで感じさせる(15)。この戦いの具体的な描写の付加は、騎士としてのGabanに対する好印象を増すものである。

一方、*Ívens saga*におけるValvinについては、Stockholm46版と羊皮紙写本版との間に際立った違いはない。泉の国の領主となったIban/Ívenに、再び騎馬試合の旅に出るよう説得する場面において、Hartmannの作品には「国や人々は奥方に任せておけばいい」(16)「今まで君は心根よりも財産の方で苦労してきたが、今や君は財産で心根を実行に移すことができるのだ」(17)といったGaweinが騎馬試合に執着するあまりに「泉の国」の事情を考えない、あるいは「泉の国」やその財産を利用しても構わないと考えているかのような姿勢の窺われる台詞があり、Füetrerはこれらを削除しているが、そもそもこのIban/Ívenへの説得場面は、*Ívens saga*においては、羊皮紙写本版の段階でも、Chrétienと比べて大幅に短縮されており、羊皮紙写本版では「ヴァルヴィン卿はイーヴェン卿に、王とともに出発し、これ以上、この城に留まって、自らの騎士としての評価や業績に傷をつけてはいけないと話した。このようにヴァルヴィン卿はイーヴェン卿を説得し、もし、彼の奥方から許しを得られればここを出発することに同意させるまでに至った。イーヴェンは彼の奥方のところへ行ってこう話した」(18)とあるのみで、Stockholm46では、「ヴァルヴィンはイーヴェンに、彼が王と共に旅をし、すぐに安

穏な生活に浸って騎士活動をやめないようにと頼み、彼がすぐにそれに同意し、彼の奥方のところへ行ってこう話すところまで説得した」(19) とあるに過ぎない。羊皮紙写本では「この城に留まって、自らの騎士としての評価や業績に傷をつけてはいけないと話した」とあるように、Valvinは「この城に留まること(王と共に旅に出ないこと)」は「自らの騎士としての評価や業績に傷をつけ」ることであるとの評価を下しており、Stockholm46でも、Valvenは、王と共に旅に出ないこと(この城に留まること)は「安穏な生活」だと考え、「すぐに安穏な生活に浸って騎士活動をやめないように」と言うことから、二つの版の間で、Íven が騎馬試合の旅に出ず、泉の国に留まることに対するValven/Valvinの否定的な考えに相違はなく、Stockholm46のこの場面ではValvinの人物像は目立った変更は加えられていないことがわかる。また、FüetrerがHartmann作品に対して付加している、Gabanと、Artus王妃を連れ去った騎士Meliaganns との戦いのエピソードであるが、これも*Ívens saga*では羊皮紙写本、Stockholm46ともに存在しない。

このように、Gaban/Valvinの人物像については、Füetrerの作品では、騎馬試合での業績を重要視するGabanの姿を肯定的に描くべく、Hartmann作品に大きな変更が加えられているのに対し、*Ívens saga*では羊皮紙写本版とStockholm46の間でほとんど相違点がない。もっとも、先に挙げた、Iweinが結婚後、再びArtus王の一行とともに騎馬試合の旅に出るようGaweinがIweinに説得する場面で、Hartmannの作品には存在したもののFüetrerによって削除された、「国や人々は奥方に任せておけばいい」「今や君は財産で心根を実行に移すことができるのだ」といったGaweinの騎馬試合への執着故の「泉の国」に対する配慮の欠如を示す台詞はいずれもChrétienの作品にはなく、Hartmannが独自に加えたものであり、また、Gabanと、Artus王妃を連れ去った騎士Meliagannsとの戦いのエピソードがFüetrer作品にのみ存在することについては、Füetrer作品でこのようなエピソードの付加が考えられたのは、この城主がArtus王妃の誘拐とGaweinが王妃救出に向かったことを話す場面において、Hartmann作品では騎士MeljaganzとArtus王の対話や、その後、宮廷の騎士達が次々とMeljaganzに向かっては敗北を喫する様の描写が付加されていたこと (20) (Chrétien 作品にはなく、*Ívens saga*でも羊皮紙写本、Stockholm46ともに存在しない)も大きな要因と考えられよう。しかし、Hartmannが、Gaweinが騎馬試合や騎士としての業績に執着する様やその悪影響を強調した箇所についてFüetrerがそれらを削除したり、新たにGabanの武勇を描いたエピソードを付加している点からは、Füetrerの側に、Gabanが騎馬試合や騎士としての業績を重要視する姿を肯定的に描く大きな必要性があったことが見えてくる。

3. 他の男性の登場人物/冒険を求める騎士のあり方に対する作者(改変者)の評価

この物語にはIban/ÍvenやGaban/Valvinの他にも騎士階級の人物は登場し、また、騎馬試合や冒険を求める騎士のあり方についての発言も登場する。この点についてもドイツ語圏の作品とアイスランド語圏の作品の間では扱いが異なる。

まずドイツ語圏であるが、Hartmannの作品において、Artus王の宮廷で推奨される、騎馬試合での名誉を重要視した騎士のあり方に疑問を抱かせる箇所の中には、既述の

Gaweinを巡るもの以外でも、Füetrer作品では削除・改変されている箇所が存在する。

Hartmann作品では、Kalogrenantが旅の途上である城に宿をとるが、そこの城主に自分が冒険を求めて旅をしている旨を伝えると、城主はひどく驚き、自分を訪ねてきた客から、冒険を求めていると聞いたことは一度もないと言う[21]。この城主の言葉は、作品の始まり早々にして、名誉を求めて騎馬試合や冒険の旅を続けるというArtus宮廷で推奨される騎士のあり方が理解されていない世界の存在を示し、そうした騎士のあり方の理想性の相対化につながり得るものであるが、Füetrerの作品では、この台詞は削除されている。

また、このKalogrenantは冒険の途上で出会う、猛獣の監督をしている不気味な風貌の野人から、お前は何を求めているのかと聞かれると、Kalogrenantは、自分は冒険を求めていると答えるが、野人は「ボウケン？　それは何だ?」[22]と尋ねる。そこでKalogrenantは、「私は騎士と言って、私と同じように武装して私と戦おうという男を探して馬を進めているのだ」[23]と説明する。すると野人は、「それではお前は、進んで困難を求め、安穏に過ごしたくはないのだな。わしは今まで、冒険とはどういうものなのか、聞いたこともなかった。しかしお前が命をかけるつもりならば、もうこれ以上わしに訊かなくてもいいように、あることを教えてやろう」[24]と応じ、この野人の住む世界が、Artus宮廷で定着している冒険中心の騎士のあり方が理解されていない世界であることを窺わせる。しかしFüetrerの作品では、自分は冒険を求めているとKolograndnが言えば、野人はすぐに、「お前が平穏な過ごし方をしたくないのなら、もうこれ以上苦労を求めて探し回らなくてもいいように、ある場所を教えてやろう」[25]と言い、この野人が冒険の何たるかを理解している様子が窺える。

Hartmannの作品ではIweinが作品の後半部で遭遇する「邪悪な冒険の城」(*Ívens saga*では「発見する冒険」の城)での冒険(二人の巨人との戦い)の前に「乙女の島の領主」と呼ばれる人物についてのエピソードが存在する(Hartmann v. 6320-6406)。この「乙女の島の領主」が若い時分に冒険を求めて旅を続け、この城で冒険に挑んだものの、自らの力に対する自信のなさから闘わずして退散し、身代わりとして自国から女性達を派遣することを求められ、現在300人もの女性達が貧しい身なりで過酷な労働を強いられている。このエピソードは、名誉を求めて冒険の旅を行う騎士のあり方が大きな害をもたらす様を伝えるものであるが、Füetrerの作品では、この「乙女の島の領主」のエピソード全体が削除されており、結果として、この300人もの女性達が過酷な労働を強いられるに至った事情は明らかにされない。Artus王妃が誘拐される挿話では、Gabanの活躍について、Hartmannの作品に付加までして詳しく語られているだけに、この「乙女の島の領主」の挿話の削除は目立つ。

このように、先に述べたGabanを巡る箇所のみならず、Hartmannにおいて、名誉を求めて騎馬試合や冒険の旅を続けるという、Artus宮廷で推奨される騎士のあり方に疑問を生じさせる箇所、あるいはそうした騎士のあり方がもたらす悪影響を伝えている箇所は、Füetrerの作品では削除の対象となっている。事実、Füetrerの作品では物語の最後にIbanと奥方の和解がArtus宮廷にも知らされたことが付加されていることも[26]、こうしたArtus宮廷で推奨される騎士のあり方を、作品全体を通じて肯定的に描こうとする作者の意図の反映と捉えることができよう。

一方、*Ívens saga*のケースであるが、Kale-

brantが世話になる城の城主の発言については、羊皮紙写本版では、城主は「冒険を求めて旅をしている騎士を最後に泊めてからどれだけ経ったものだろうか」(27) と言い、これはHartmannとは異なる。なお、野人とのやり取りはHartmannとほぼ同様である。しかしStockholm46では、城で宿をとる場面は「晩に私はある木造の城へ到着し、そこで城主より手厚いもてなしを受け、朝、私は彼から暇を得て出発した」(28) としか述べられておらず、この城での詳しいエピソードは削除されており、Kalebrantと城主のやり取りは描かれていない。野人とのやり取りでは、野人が自己紹介を終えると、彼はKalebrantに対し、「そういうお前は何者だ」と尋ねることはせず、Kalebrantはすぐに「私は彼に、私が自分の騎士としての力を試すことのできる場所への道を教えてほしいと頼みました。そして彼は温泉のように沸き立っていながら毒のように冷たいある泉まで、そこから少しの距離、馬を進めるように言いました」(29) と、野人は冒険を求める騎士のあり方に疑問をさしはさむことなく、すぐにKalebrantが騎士としての力を試すことのできる場所を教えてくれる。Kalebrantが冒険や騎士について解説する場面はなく、従って、野人が「冒険というのはその言葉も、また話にも全く聞いたことがない」(30) などと語ることもない。

また、Hartmann作品における「乙女の島の領主」のエピソードについては、*Ívens saga*羊皮紙写本版では、既述のように、Ívenが「発見する冒険」と呼ばれる城において、強制労働させられている300人の女性の姿を見ても彼女らの方へは行かず、すぐに広間の方へ向かってしまう。したがって彼女らの強制労働の理由や彼女らの出身地は明らかにされず、「乙女の島の領主」のエピソードも存在しない。一方Stockholm46ではこのエピソードは存在し(Stockholm46 S. 126-127)、「乙女の島の領主」はハンガリー(Üngaria)のReinionという名の王となっており、自分の軍勢を連れてここへ騎行してきたところ、二人の黒男から戦いを求められ、彼らと戦ったものの、最後には負けてしまい、最も美しく礼儀正しい300人の女性達を奴隷として彼らのところへ送ることで命を保証される。なお、王の騎行の理由・目的は述べられていない。

このように、*Ívens saga*では、Kalebrantが世話になる城主の発言については、Stockholm46ではこの城での詳しいエピソードがすべて削除されているため、Füetrerとの比較はできないが、Kalebrantと野人とのやり取りについては、Füetrerのケースと同様の改変がなされている。一方、「乙女の島の領主」のエピソードの扱いは全く異なっている。また、Füetrerとは異なり、物語の最後にÍvenと奥方の和解がArtus宮廷に伝えられたとの記述もない。

このように、Iban/Íven、Gaban/Valvin以外の騎士や、冒険を求めて旅を続ける騎士のあり方については、Füetrer の方がStockholm46版*Ívens saga*に比べ、より肯定的に描こうとの強い意図が窺われる。

4. 泉の国の奥方

泉の奥方はHartmann作品ではLaudine、Füetrer作品ではLawdamyという名であるが、*Ívens saga*では羊皮紙写本版、Stockholm46ともに、泉の奥方の名前は明かされない。この泉の奥方は、自分の夫である泉の国の領主がIban/Ívenによって殺害されてほどなく、その殺人者であるIban/Ívenを新たな夫に迎える。この点について、特にHartmannの作品では過去、様々に議論がなされてきた(31)。

奥方は自ら進んで再婚の道を選ぶわけでは

なく、侍女のLunet/Lunetaの助言によって心を動かされ、最終的に再婚を決意する。当初、Lunet/Lunetaから再婚を勧められると奥方はひどく驚き、強い調子で反対の意を示す。しかし、それから奥方が最終的にIban/Ívenとの再婚を決意するに至るまでの経緯の描写については、作者によって大きな違いがある。

まず、Hartmannの作品と*Ívens saga*羊皮紙写本版においては、奥方は殺害された先王に対するこだわりが強く、冷静さを欠き、Lunete/Lunetaから少しでも先王の騎士としての優越さを疑問視することを言われれば、その度毎に感情的になり、怒りを露わにし、一度は彼女を部屋から追い払ってしまいさえする[32]。しかし、Füetrerの作品、およびStockholm46版*Ívens saga*では、いずれも、このような奥方の人物像が大きく改変されている。

この両者の改変に共通するのは、再婚を勧めるLunet/Lunetaに対する奥方の感情的な物言いが少なくなり、奥方が目の前の事態に対して冷静に対応する人物へと改変されている点である。

Füetrerの作品では、奥方Lawdamyが夫を殺害された後、その殺人者であるIbanを新たな夫として迎えるに至るまでの経緯について、Hartmannの作品よりも早い段階からLawdamyと諸侯との協議が行われ、二度目の協議では諸侯もIbanを夫とすることを勧めてくれるなど、この間のLawdamyの行動が極力悪い印象を与えないように改変されている、との指摘がなされている[33]。しかし、奥方LawdamyとLunetのやりとりにあらわれる奥方の姿勢にも、Hartmannとの相違が見られる。Lunetが「奥方様、お殿様と同じように国と泉を守る勇気のある方のことをお考えになるべきです」[34]と助言すると、奥方は「お前は狂っています」[35]と非難するが、その論拠は「軍勢と共にそのようなことを引き受けようという人をどこで見つけようというのです。国中探しても無理ですわ」[36]と比較的現実を客観的に見た上でのものである。それを受けてLunetは、自分達の先王を殺害した人物は騎士として相応しい人物だとして、彼を新たな夫とすることを勧める。すると奥方はこの助言が気に入らず、憤慨し、一旦はLunetを部屋から追い払うが、ただ一人残されると、Lunetが忠誠心から助言してくれたのに追い払ってしまったと後悔し、すぐに彼女を呼びにやる。もっともLunetが再びやってくると「何があなたからそのように知性を奪ったのか、一向にわかりません。ある男の人を、その勇敢さにおいては抜群であった方と同等だと褒めるのですから」[37]と、再び彼女を非難するものの、Lunetから「もし二人が、称賛を求めて戦った場合、勝った方と負けた方と、どちらが称賛を得るにふさわしいでしょうか」[38]「私のお殿様が、御自身の手で生き返ることができません以上、アルトゥースがすぐにもこの国へ来た場合、どなたがあなた様の騎士になられるのでしょうか」[39]との指摘を受けると、それに対する奥方の返事は「そうすると、私はこの国の支配者を殺した人に愛を与えよというのですか。人々は私のそうした行為をひたすら悪く思うでしょうに」[40]と、否定的なものでありながらも、先王へのこだわりや、先王の優越さを否定されたことに対する怒りはもはやなく、むしろ彼女が気にしているのは国民の反応である。その後、Lunetは奥方に、諸侯を呼び寄せるよう提案し、すぐにそれはなされることになる。このように、Füetrer作品では、奥方はLunetを非難することはあっても、感情的になることは少なく、事態に対し、比較的冷静に対処できる人物との印象を与える。

このような改変特徴はStockholm46版*Ívens*

*saga*ではさらに一歩進んでいると言える。Stockholm46では、奥方がÍvenとの結婚に至る過程において、奥方は臣下達の前で内膳頭に自身の意向や背景事情を説明させ、彼らに、自らの結婚に関して同意を求めたり、あたかも臣下達の望みに応じて結婚を決意したかのように装うような形はとらず、当初から結婚の方針を固めており、それを自ら臣下達に通達するという形になっており、Kalinkeは、この箇所をもとに、Stockholm46版では、奥方は、羊皮紙写本の場合に比べ、decisive and aggressiveであると評しているが(41)、Füetrer作品と同様、奥方とLunetaとのやりとりにあらわれる奥方の姿勢にも、羊皮紙写本版との大きな相違がある。Stockholm46での奥方は、当初は羊皮紙写本版同様に「生きているよりも、悲しみのあまり死んでしまった方がよろしいですわ」(42)と言い、Lunetaから再婚相手として亡き夫と同じほどに武勇に秀でた騎士の存在をほのめかされると、最初こそ、「あなたは私に決して嘘をつくことはありませんでした。この世に殿様と同じぐらい優れた人など、見つかるはずはありません」(43)と言って反発するものの、その後は冷静に対応し、激昂したりすることはない。Lunetaから「同じように武装した騎士二人が闘って、片方が勝ったとします。御判断ください。どちらがより優れた騎士でしょうか」(44)と言われ、Artus王の軍勢から泉を守れる騎士を新たな夫とするよう促されても、「私たちの国には、アルトゥース王やその騎士達に立ち向かえるような騎士は心当たりがありません」(45)と、冷静な対応をする。Lunetaが勧める騎士がUrien王の息子で、夫の殺人者であると言われると、「お前は私を愚か者だと思っているのですね。私が私の殿様の殺人者を夫に迎え、今回の行いで彼に名誉を与えようなどという」(46)とLunetaを非難するも、そこでLunetaが「あなた様の御殿様は彼に馬で向かってゆき、罪もないのに彼を殺そうとしたのです。そして彼は立派な勇士として自分の命を守ったのです。でなければ、他にどうすればよかったというのでしょう。さあ、御自身で御裁定ください。どちらがより正当だったでしょうか。貪欲に追い求めた方でしょうか。それとも、勇敢に自分を守った方でしょうか」(47)と、先王の行為や態度を厳しく批判し、Ívenを弁護すると、奥方は「もちろん自分を守った方です(と奥方は言った)。また、その人のことは以前に聞いたことがありますわ」(48)とLunetaの意見を認め、その際の様子からは怒りは感じられない。この間、Lunetaを部屋から追い払うこともない。

このように、奥方がLunet/Lunetaから再婚を勧められ、それを決意するに至るまでの彼女の言動の描写には、Füetrer作品とStockholm46版*Ívens saga*の間で同様の改変傾向が見られる。ただ、Füetrer作品ではStockholm46と比べれば、奥方の先王へのこだわりや先王の優越さを否定されることに怒る様はややはっきりと残されており、Lunetを一旦部屋から追い払う点も同様に残されている。一方、Stockholm46版*Ívens saga*ではLunetaが先王の行為を厳しく指弾し、Ívenの行為はひたすら弁護することで、奥方が先王の殺人者を夫に迎えることをより正当化しようとの意図が窺われる。結果として、この場面では、Füetrerと比べ、Stockholm46版*Ívens saga*の方が、奥方がより物事に冷静沈着に対処できる賢明な女性との印象を与えられるよう、また奥方の再婚をより正当化できるようにしようとの強い意図が感じられる。しかし、奥方の他の登場場面については、他にStockholm46版*Ívens saga*のみに見られる大きな改変が存在する。

それは、Iban/ÍvenがLunet/Lunetaの無実を

証明するために戦い、勝利を収めた後の場面である。羊皮紙写本では、Ívenは勝利の後、奥方と会話を交わすことになる。結局、奥方は、この場面では最後まで彼をÍvenだと気づくことはなく、Ívenは泉を後にし、途中までLunetaが同行する。ÍvenはLunetaに、自分と奥方を和解させて欲しいと頼む。しかし、Stockholm46では、この場面には奥方は登場しない。羊皮紙写本においてÍvenと奥方が交わした会話の内容の一部が、ÍvenとLunetaの間で交わされるのである[49]。結果として、Stockholm46では、Ívenと奥方の対面は物語の最後まで行われることはなく、同時に、奥方がÍvenと対面しながら、彼だと気づかないまま会話を続けるという要素もなくなっている。羊皮紙写本では「私に対して怒りを抱いている奥方が、その悪感情を捨てて下さらない限り、今日のところはここに留まることはできません」[50]というÍvenの訴えを受けて、奥方が、自分の事を言われているとは知らず、「あなた様に怒りを抱くような奥方を、礼儀をわきまえた方だとは呼べません」[51]と言って“奥方"を批判するが、これはStockholm46にはない。少なくとも、結果としては、このような、奥方を貶めることになりかねない要素がStockholm46には存在しないことになる。

このように、泉の奥方の人物像については、Füetrerと比べ、Stockholm46版*Ívens saga*の方が、冷静さを持った賢明な女性との印象を与えようとの改変者の意図が窺える。

結論

このように、Chrétien de Troyesの*Yvain*を原典として、ドイツ語圏とアイスランド語圏で複数の段階に亘って翻案が行われたうちの第二翻案段階と言えるUlrich Füetrerの*Iban*とStockholm46版*Ívens saga*につき、その言語圏の第一翻案段階と比べた場合の大きな特徴である「物語の平板化」と不可分である登場人物の造形特徴について、*Iban*とStockholm46における、それぞれの言語圏の第一翻案段階との相違点について、この両者の間で比較を行った。物語の主人公Iban/Ívenについては、両者の改変に共通して見られたのは、作品前半部から模範的な騎士として描かれ、作品半ばでの挫折を通じて変貌を遂げるようには描かれていないという点であり、一方、共通しては見られなかったのは、Füetrerの作品では、Ibanが挫折に至った原因をIban自身よりもむしろ外的な要因としてのfraw Mynneに帰されており、一方、Stockholm46版*Ívens saga*においては、作品の後半部においても、主人公Ívenの言動が、より弱者への奉仕精神に満ちたものへと改変されている点である。Gaban/Valvinについては、*Ívens saga*では羊皮紙写本版とStockholm46の間にほとんど差異がない一方、ドイツ語圏では、ChrétienからHartmannへの改変時に、Gaweinが持つ冒険での業績へのこだわりが周囲に悪影響をもたらす様が強調されていたのが、Füetrerはそうした箇所を削除し、さらには王妃救出のためのMeliagannsとの戦いという、Gabanが人を助けるために騎士として武勇を発揮する場面の描写を付け加え、Gabanが与える印象を良いものにしている。他の男性の登場人物の描写や冒険を求める騎士のあり方に対する評価についても、Stockholm46と比べ、Füetrerの方が、騎馬試合や業績を重要視するArtus宮廷の騎士達、ならびにそうした騎士のあり方を肯定的に描こうという意図がより強いことが窺われた。一方、泉の奥方については、Füetrerと比べ、Stockholm46版*Ívens saga*の方が、より冷静沈着に物事に対処できる賢明な女性との印象を与えられるよう改変されてい

ることが明らかとなった。

Füetrer作品の原典であるHartmann von Aueの*Iwein*は13世紀初頭の作とされ、いわゆるドイツ中世文学盛期の作品群に属する。作者は一度は挫折を経験しながらも最後には騎士として完全な栄誉を手にする主人公の生きざまを通じて、騎士のあるべき姿を世に問うていると言えよう。しかし、Füetrerが活躍した15世紀は、かつてHartmannの時代に宮廷騎士文化を支えていた騎士階級はすでに凋落し、それに代わって都市貴族が大きな勢力となっていた時代である。彼らは騎士文化に憧れ、騎士文学を愛好し、自らも騎士のように武装するなど、かつての宮廷騎士文化を模倣したりもした。しかし、彼らは日常生活では商工業に携わる身分であり、彼らにとって騎士物語とは、あくまで、その登場人物の真似をすることによって自らの自尊心を満たすことのできる遠い時代の夢物語に過ぎず、もはやHartmannの作品中で問題とされた騎士のあるべき生き方が彼らの実生活に直接影響を及ぼしたりするものではなかったと思われる。このような環境下でいわゆる中世盛期の宮廷文学作品の翻案を行うとなれば、作品中の騎士達の生きざま、特に彼らの主たる活動として紹介される冒険や騎馬試合を否定的に描くことはできず、それらの活動を理想的なものとして肯定的に描くことこそが必要であったと考えられ、また、作品中に登場する騎士(貴族)階級の女性についても、その立場にある人物として相応しい人物像に描く必要があったであろう。

一方、アイスランドのサガ文学も、主人公をはじめとする主要登場人物の性格を、作品を通して、特に挫折を通じて大きく変貌させるという傾向は少ない。善良な人物であれば、作品の始めから終りまで、善良な人物として描かれ、邪悪な人物であれば、作品を通してそのような人物として描かれることが多い。

このような各々の言語圏における文学作品受容のあり方や文化特徴が、本稿で取り上げたFüetrer作品とStockholm46版*Ívens saga*における改変の背景にあったと考えられ、結果として、それは両者の改変傾向に一定の共通性をもたらすものでもあった。

一方、Füetrer作品とStockholm46版*Ívens saga*における改変の相違点については、特にFüetrerの作品において、Stockholm46以上に、騎馬試合や冒険での業績を重要視する騎士のあり方や、それを模範的に体現するGabanが好印象を与えるように描かれている点は、既述の15世紀ドイツ語圏での騎士文学の受容形態の反映と見ることができるだろう。一方、泉の奥方については、Füetrerと比べ、Stockholm46版*Ívens saga*の方が、より冷静沈着に物事に対処できる賢明な女性との印象を与えられるよう改変されているが、サガ文学に登場する女性達には、堂々と自己主張し、事態の進行に大きな影響力を持つ人物が多く(52)、Stockholm46の奥方にはこうした女性像の影響を見ることができよう。

Notes

（1） 現存する羊皮紙写本Stockholm6とAM489はそれぞれ1400年頃、および15世紀中頃の作成とされる。ノルウェー語への翻案からは一世紀半～二世紀が経過しており、その間に、一つまたは複数の写本段階があった可能性もある。一方、Stockholm46は1690年頃の作成とされ、Ormsbókは14世紀半ばとされるが、同様にOrmsbókからStockholm46へと写された*Erex saga*を伝える他写本の作成時期・場所等を合わせて考えると、*Ívens saga*のStockholm46における、羊皮紙写本との諸々の相違点は、遅くともOrmsbókにおいては存在していたと考えるほうが自然ではないかと思われ

る。拙稿「Stockholm46の„*Ívens saga*"」(早稲田ドイツ語学・文学会『Waseda Blätter』第16号, 2009年, 41-57頁, 以下「拙稿1」とする)の51-55頁を参照。

（2） テキストはFüetrerのものについては、Ulrich Füetrer: Iban. Das Buch der Abenteuer. Teil 2: Das annder puech. Nach der Handschrift A in Zsarb. mit Bernd Bastert hrsg. von Heinz Thoelen. S. 220-277. Göppingen 1997. を、Hartmannの作品については、Hartmann von Aue: Iwein. 4., überarbeitete Auflage. Text der siebenten Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff. Übersetzung und Nachwort von Thomas Cramer. Berlin / New York 2001.を使用した。なお、*Ívens saga*については、Stockholm6、AM489、Stockholm46のそれぞれのTranscriptionが三段パラレルで掲載されたBlaisdell, Foster W., ed. Íven saga. Ed. Arnam., Ser. B, vol. 18. Copenhagen, 1979.を使用した。また、Chrétienの作品については、Kristian von Troyes Yvain (Löwenritter). Textausgabe mit Einleitung, Anmerkungen und vollständigem Glossar. Hrsg. von W. Foerster. Halle, M. Niemeyer, 1902. を使用した。

（3） 物語の登場人物の名前や綴り字は作者や版によって異なっている。本稿では特定の作品(版)を問題にする際には、その作品(版)における名前や綴り字を記し、それ以外の場合は、この作品で中心的に扱うFüetrer 作品における名前(綴り字)とStockholm46版*Ívens saga*におけるものとをそれぞれ斜線で区切って表示する。

（4） *Ívens saga*からの引用箇所には本稿で使用しているBlaisdellの版における該当頁数を表示した。以下同様。なお、本稿では、羊皮紙写本版については、Stockholm6を引用する。AM489は途中(S. 117)までしか遺されておらず、Stockholm6はBlaisdellの版でのS. 30からS. 38にかけて欠落があるが、本稿ではこの間の引用箇所はなく、両羊皮紙写本間で共通して残存している部分は、細かい点を除き、基本的に大きな違いはない。

（5） *Ívens saga*の日本語訳における鉤括弧は筆者による補記。以下同様。なお、Íven(Ivent)に関しては、一般に研究論文中ではÍvenの形が用いられることが多いことから、「イーヴェン」とした。

（6） Mertens, Volker: Laudine. Soziale Problematik im >Iwein< Hartmanns von Aue. Berlin 1978 (Beihefte zur ZfdPh.3), S. 76, 77; Voß, Rudolf: sunder zuchte. Ulrich Füetrers Rezeption des 'Iwein'-Verses 1056. ZfdA 118 (1989), S. 122-131, S. 124.

（7） ------þar til er hann kom Jannat gardz hlíd eíns mikils herra. (S. 125) ……彼がある別の力ある主人の門のところへ来るまで。

（8） for Ivent I þann kastala sem hann hafde unnit jotuninn ok græddi sik þar ok dýr sitt (S. 125) イーヴェンは彼が巨人を斃した城へ行き、そこで彼と彼の獣は傷を癒した。

（9） *Ívens saga* Stockholm6 S. 126。この「発見する冒険」と呼ばれる城でのÍvenの行動の羊皮紙写本版とStockholm46との違いについては、すでにMarianne E. Kalinkeが指摘している。(Kalinke, Marianne E.: King Arthur North-by-Northwest. The matière de Bretagne in Old Norse-Icelandic Romances. Bibliotheca Arnamagnæana, XXXVII. Copenhagen: Reitzel, 1981, S. 187-191.) なお、この城でÍvenが戦う相手はStockholm46では二人の黒男達(blämenn)であるが、羊皮紙写本版では二人の巨人の息子達(Jotuns synir)であり、ドイツ語圏の作品ではいずれも二人の巨人達(risen)である。

（10） *Ívens saga*羊皮紙写本版、Hartmann作品、Füetrer作品ではいずれも、Íven/Iban/Iweinの真意はともあれ、翌朝彼が城主に暇を乞うと、城主から戦いを命じられる形になっている。(*Ívens saga* S. 127 / Hartmann v. 6587-6619 / Füetrer 詩節v. 246-247)

（11） 拙稿「Ulrich FüetrerのIbanにおける騎士像」(早稲田ドイツ語学・文学会『Waseda Blätter』第17号, 2010年, 31-44頁, 以下「拙稿2」とす

る)の34-36頁を参照。

（12） 拙稿2の38-39頁を参照。

（13） Hahn, Ingrid: güete und wizzen. Zur Problematik von Identität und Bewußtsein im >Iwein< Hartmanns von Aue. PBB 107 (1985), S.190-217., 岡本麻美子:「『イーヴェイン』－êre の崩壊とその再構築」(東京大学教養学部外国語科『外国語科研究紀要』39(1) ,1992年, 63-133頁)。

（14） 拙稿2の38-39頁を参照。

（15） 拙稿2の37-38頁を参照。

（16） bevelhet ir liut unde lant.(v. 2889)

（17） irte iuch etewenne daz guot / michels harter dan der muot, / nû muget ir mit dem guote / volziehen dem muote.(v. 2905-2908)

（18） taladí herra Valv(en) vid herra Iv(ent) ath hann skyldí fylgia brott kongínum ok þar eigi leíngí vera J þeim kast(ala) ok fordiarfa suo sín Riddara skapp. ok att giorfí. ok þar til gatt herra Valv(en) talt firir herra Iv(ent) at hann Jatadí ath fylgia honum suo framt sem hann fengí leyfí af fru sinní. Iv(ent) gekk nu til fru sinnar ok m(ælti) (S.78)

（19） Valvin bad herra Ivent at hann færi med könginumm ok tapadi æigi sva sïnum riddaraskap at leggiest þegar i hçglifvi ok gat sva umm talit at hann jätadi þegar ferdinne ok gieck til sinnar frü ok mællte: (S. 78)

（20） Hartmann (v. 4528-4726)

（21） des wundert in vil sere, / und jach daz im nie mere / dehein der gast wære komen / von dem er hæte vernomen / daz er âventiure suochte, (v. 373-377) 彼(城主)はひどく驚き、自分を訪ねてきた客から、冒険を求めていると聞いたことは一度もないと言った。

（22） ‘ âventiure? waz ist daz?' (v. 527)

（23） ich heize ein riter und hân den sin / daz ich suochende rîte / einen man der mit mir strîte, / der gewâfent sî als ich. (v. 530-533)

（24） ‘sît dîn gemüete stât alsô / daz dû nâch ungemache strebest / und niht gerne sanfte lebest, / ichn gehôrte bî mînen tagen / selhes nie niht gesagen / waz âventiure wære: / doch sag ich dir ein mære, / wil dû den lîp wâgen, / sone darftû niht mê vrâgen.' (v. 544-552)

（25） ‘ wiltu mit rúe und frid nicht leben, / so weis ich dich wol an ein ennd, / das du nicht ferrer darfft nach ungmach streben!' (詩節23, v. 5-7)

（26） zer tavelrundt hort man auch nu ditz märe; / des frewdt sich dortt dy werden schar, / das mit lieb ennde hett nu all sein schwäre.(詩節296, v. 5-7)今や、円卓にもこの話(Iban と奥方との和解)が伝えられた。そこでは立派な人々は、今や彼のすべての苦しみが愛によって終わったことを喜んだ。

（27） huersu lóngu næst hann herbergdí þan Riddara er attburda for ath leíta.(S. 9)

（28） at kvçlldi kom ek i eirn kastala ok fieck ek þar gödar nadir af herra kastalans ok at morni tök ek ordlof af | hçnumm til brott reidar (S. 7-9)

（29） Ek bad hann visa mier veg þängat at sem at ek mætti reyna minn riddaraskap enn hann bad mik rïda skamt þadann til eirnrar keldu er vellur sem hver enn er þö kçlld sem eytur.(S. 13)

（30） hann sv(arar) ok kuezst eigi hafa heyrt æfuentyr nefnt. e(da) getit.(Stockholm6. S. 13) 彼(野人)は、冒険というのはその言葉も、また話にも全く聞いたことがないと答えて言った。

（31） 例えばPeter Wapnewski は「あのようにひどい形で殺された男の妻がその殺人者と結婚するというのは、Iwein の僅かな期限破りと比べて遥かに重大な誠実さへの違反である」と Laudine を糾弾し、(Wapnewski, Peter: Hartmann von Aue. Stuttgart 1962, S. 67.)一方 Kurt Ruh は、Laudine のモチーフの伝承過程を根拠にして、Laudine は道徳の枠組みから外して捉えるべきであると主張している。(Ruh, Kurt: Zur Interpretation von Hartmanns Iwein. Philologia Deutsch. Festschrift zum 70. Geburtstag von Walter Henzen, Bern 1965, S. 39-51; wieder in: Hartmann von Aue (WdF 359), Darmstadt 1973, S. 406-425, S. 417-420.)

（32） Hartmann (v. 1796-2176)、*Ívens saga* Stockholm6 (S.40-50)

（33） Carlson, Alice: Ulrich Füetrer und sein “Iban". Riga 1927. (Diss. München 1926), S. 34-40; Mertens, ebd., S. 74; Behr, ebd., S. 9.

（34） ---denket, fraw, nach ainem sölichen man, / der alls mein herr türr lanndt unnd prunnen weren.(詩節64, v. 4-5)

（35） ---du tobst, (詩節64, v. 6)

（36） Wo wollt man ainen finnden, / der sichs mit mannes wer / allso törst unnderwinnden? / den funnd man nicht in aller chünig her! (詩節65, v. 1-4)

（37） ---was dir penäm / dein witz allsus, des hat mich ymmer wunnder, / das du dem gleich lobst ainen man, / der mannhait was erkernet gar pesunnder! (詩節71, v. 4-7)

（38） ---wo zwen nach preyse ringen, / wellches lob sol prechen für, / wer gsigt oder wem an preis thúet misselingen? (詩節72, v. 5-7)

（39） Seydt das nicht sollt genesen / mein herr von seiner hanndt, / wer wil ewr kempffe wesen, / seyd Artus kumpt vil schier zúe disem lanndt? (詩節74, v. 1-4)

（40） ---solt ich in dann mynne weren, / der mir schlúeg disen lanndes wiert? / das wurd dy diet mir gar zúe argem kerenn! (詩節74, v. 5-7)

（41） Kalinke, ebd., S. 183-185.

（42） þötti mier betra at deya af harmi medur hçnumm, enn lifa eptir,(S. 40)

（43） Alldreigi laugstu mier lÿge, þui at huorgi fiekst i verçlldunne hans jafnninge (S. 40-41)

（44） ef at tveir riddrar jafnnvel herklæddir strīda, ok sigrast annar, dæm þü nü huor betri riddari er, (S. 41)

（45） aungvann veit ek þann riddara i voru landi at þori at strīda vidur hann edur hannss menn,(S. 43-44)

（46） Nü hyggur þü mik vitlausa, at ek munda eiga bana manninn bönda müns edur dçma hçnumm nockura sæmd til handa, af þessu verki, (S. 48)

（47） þinn böndi reid til hanns ok villde drepa hann saklausann, enn hann vardi lif sitt sem gödur dreingur edur huad lä hçnumm annat fyrir nü dæmit sialfvar huor riettara hafde sä er til sötte medur agyrnd edur hinn er sik vardi med hreyste (S. 48)

（48） vist sä sagdi früinn er sik varde ok heyrt hefver ek sagt af þessumm manni ädur (S. 48)

（49） 拙稿1の49-51頁を参照。

（50） þat ma eigi vera daglangt ath ek duelíumz her fyr enn su fru firir gefr mer illuílía sínn er reidí hefir aa mer.(S. 123)

（51） Alldri samdí godrí konu at synnía gardz hlid sítt suo godum Riddara sem þu ert.(S. 123)

（52） Quinn, Judy: Women in Old Norse Poetry and Sagas. A companion to Old Norse-Icelandic literature and culture. Ed. Rory Mcturk. 2005, S. 518-535, S. 519; Jesch, Judith: Women in the Viking Age. Woodbridge 1991, S. 182-189, 193-198.